

日本に住んでいようと

パレスチナ難民キャンプに住んでいようと

私たちは同じ時に生まれ今まで生きてきた

将来どうやって生きていこう

私たちの生活環境はあまりにも異なっている

だけど同じように悩んでる

この夏、レバノンのパレスチナ難民キャンプに訪れた私は

そこで現地の若者と話をした

Free Talks at Camp Rashidyieh

SAEKO KASE (東京外国語大学アラビア語科2年)

“Free Talks at Camp Rashidyieh”



(ラシャディエキャンプの海岸にて)

出演 加瀬冴子 山村頼子 リーマ マルワ モナ ザイナブ マルヤム
ファーティマ ラシャ ガージー リヤナ スーザン サラーフ
撮影 柳澤彰男
編集 加瀬冴子
SPECIAL THANKS Beit Atfal Assmoud (<http://www.socialcare.org>)
パレスチナ子供のキャンペーン (<http://www32.ocn.ne.jp/~ccp/>)
山本剛氏

-About this Film-

近年、パレスチナをテーマにした映画は多い。その多くは、パレスチナ（今のイスラエル）から追放された高齢者や10歳くらいまでの子供に焦点を当てているか、または、分離壁やエルサレムの帰属といったパレスチナ問題そのものに焦点を当てた作品である。

しかし私が一番知りたかったのは自分と同世代の若者の事。なぜなら彼らこそ次にパレスチナの将来を担う人たちだからだ。ちょうど、私たちが次の日本を担う世代であるように。

レバノン南部、ラシャディエ難民キャンプ。そこで若者と話をした。彼らがどんなふうに生き、将来をどう考えているのか。この映像は、話を通して見えてきた若者たちの記録だ。

どうか、ビデオに映る彼らを忘れないでほしい。中東という地域で、多くの問題に晒されながら必死で生きているパレスチナ人のことを、どうか忘れないでほしい。

世界から忘れられたら、問題は決して解決されないだろうから。

目次



ラシャディエのモスク

1. レバノンを訪れて
2. 難民キャンプを訪れて
3. 若者と交流する中で
4. レバノンのパレスチナ難民の歴史概略
5. Beit Atfal Assmoud/CCP について

さいごに



1、 レバノンを訪れて

おかしな国。レバノンを訪れた私の素直な感想だ。

相次ぐ戦争の疲労に苦しむ国家内部で

首都ベイルートだけが異常に膨れ上がり、

そのせいで国が奇妙に歪んでいるような印象を受ける国。

首都ベイルートに広がっているのは

まるでパリのような街並み。

確かに街には弾痕の残るビルが点在しており、

軍がテロリストを警戒して街中を警備している。

バスや自家用車を利用した爆弾テロを警戒してだろう、

駐車禁止の張り紙がそこかしこにはられている。

だが・・・マクドナルドにスターバックス、

高級レストランに洒落たカフェ。

街を歩けば見当たるのは着飾った女性や裕福そうな家族。

キリスト教徒地区にはレバノンの六本木ヒルズとでも言おうか、

雑貨屋や洋服屋、CDショップの入った高級なデパート。

一歩ベイルートを出れば、

広がっているのは発展途上国の街並みだというのに。

ほかの町全てを詳しく観察したわけではない。

しかしタクシーから見える景色は

明らかにベイルートのそれとは異なっていた。

ぼろぼろの建物、農園、簡素ないでたちで働く人々、

そして物乞いの子供たち・・・。

社会格差という言葉の無慈悲さが強烈に伝わってくる日々だった。



2. 難民キャンプを訪れて

今回ビデオを撮影したキャンプは、レバノン南部にある。

ラシャディエ難民キャンプ。

イスラエルにほど近い、海沿いにある街だ。

街・・・成立から60年もの時を経た難民キャンプは

どこも今や本当にごく普通の街と見まごう程の場所。

小さな商店と、ひしめく家々。

町中にあふれる子供たちは人懐っこく、

元気に走り回っては写真撮ってとせがんでくる。

若者たちは談笑し、家のそばでおじいちゃんは居眠り。

一見平和な光景は、しかし平日の昼間のものなのだ。

¹UNRWAの厳しい授業についていけずドロップアウトした子供たち

²働く当てがなくキャンプでふらつくしかない若者。

いつか自分の故郷に帰ることを夢見ながら

もう60年も帰れずにいる人々。

彼らの生きている環境はあまりにも、辛い。

しかし彼らは見知らぬ私たちをいつも、笑顔で迎えてくれた。



¹ UNRWAの小学校の授業はレバノンの教育内容と統一されているが学年ごとに進級試験がある等、そのレベルは高度すぎてついていけない子供が多い。

² レバノンのパレスチナ人には75種の職業制限が設けられている。

ビデオにはないが紹介したいキャンプがある。

レバノン北部、キャンプ・ナハルエルバレド。

³2006年の戦闘で、この街は徹底的に破壊された。

私は目を覆いたくなくなった。

街は、瓦礫だらけだった。

柱と床だけの建物に壁はなく外が360度見渡せた。

ここは昔、1・2位を争うほど大きなキャンプだったという。

確かに広がった。

しかし、賑やかな町の面影は見当たらなかった。

争いが破壊したのは建物だけではない。

思い出の詰まった家具や写真や・・・すべては

消え去ってしまった。

「家は建て直せても、思い出を取り戻すことはできない」

お世話になったNGOのカセム氏は言う。

「これは第二のナクバだ」

1948、パレスチナ人が故郷を追放された時のことを

彼らはナクバ（大破局）と呼ぶ。

この第二のナクバを、一体世界中のどれほどが知っているのだろうか。



³ 過激派のファタハ・アルイスラームとレバノン軍が2006年、北部で戦闘。ナハルのほとんどが破壊された。

3. 若者と交流する中で

「ラシャディエは好きだけど・・・」

自分の生きてきた場所に愛着がないわけではない。
しかし彼らにとってそこは強制されて住む
息苦しい場所でもある
次にこの土地に責任を負うとなると
余計逃げ出したくもなる
それはまるで私が日本という国の責任を負うことに
逃げ出したい気持ちを感じるのと似ていた。



モナ

「パレスチナに帰りたい」

彼らは目を輝かせてそう言う。
なぜ、一度も足を踏み入れたことのない土地に？
いわく世代間でその素晴らしさが語られてきたのだという。
彼らにとってパレスチナとは
自分の理想の生活ができる桃源郷であって
現実の生活に耐え抜くための唯一の支えなのかもしれない



マルワ

「お金を得るために働く」

自分の内面にプラスになる職業に。
給料だけが問題じゃない。
日本の若者はそういうプレッシャーの中で生活し
その反動が今問題として浮き上がっていると私は思う。
職業は、単純に給料を得て生活を送る手段。
彼らとの話の中で、
ふとそんな当たり前なことに気づいた。



ナビール

「結婚はいつかするつもり」

それはもちろん結婚したいわ。
そして子供を作って、
パレスチナ人が増えればそれは武器になりうるから
若い女性たちは言う。
晩婚化と少子化の進む国に住む一員として
結婚という言葉への認識の差を痛感する一言だった。



リーマ

レバノンのパレスチナ難民



画像提供 : Beit Atfal Assmoud

レバノンにおけるパレスチナ難民の歴史概略と現状

1948～ イスラエル独立宣言（UN のパレスチナ分割決議案を受け）

この時勃発した第一次中東戦争において、約75万人のパレスチナ人が自分の土地から追放させられる。うち10万人がレバノン国境を越え、彼らとその子孫が現在のレバノンのパレスチナ難民キャンプを形成している。レバノン側はパレスチナ難民に対し居住を許可、最終的に16か所となる特別居住区を提供。UNRWA の人道支援を受けながらキャンプでの生活が開始。イスラエル軍に「戦争中故の数週間の立ち退き」を命じられた彼らは、この時から60年、パレスチナの故郷へ足を踏み入れることなく今でも難民キャンプで生活している。

1959～ 二重苦の始まり

国連は1948年12月に、パレスチナ難民には故郷に帰る権利「帰還権」があるとし、機関を望まないものにか補償金が出されるべきであるとする決議を出していたが、1959年、当時のイスラエル政府はこれを拒否した（今でも拒否は続いている。）これはレバノン政府にとり、どこに帰るあてもなくいつまで自国内にいるのかわからない10万以上の難民を抱えなければならないという困難を意味した。それ以来、レバノン政府は自国のパレスチナに対し抑圧を強めていく。現在、レバノンのパレスチナ難民はレバノン国籍がなく、そのため保険など多くの保護を受けられない上に、75種の職業制限が設けられているため労働もままならないという状況で生活している。

1967～ レジスタンスの隆盛（第二次中東戦争）

1967年のイスラエルのガザ地区占拠を受け、パレスチナの抵抗運動は隆盛し、その勢いはPLOのプレゼンスを高めた。この勢いはレバノンにまでおよび、PLOの支援を受けたレバノンのパレスチナ人によるレジスタンスとレバノン軍の摩擦は1969年の春、首都におけるレジスタンスの巨大なデモにまで発展した。本格的な戦争になることを恐れたレバノン政府は、1969年11月に「カイロ協定」を結んだ。これは、PLOがレバノンで自治政府なみの力を持つことを認めるものであり、以来、PLOはレバノン南部に本部を移し、イスラエルに向けて様々な抵抗を展開するようになった。イスラエルとPLOの戦い、レバノン軍とPLOの摩擦、イスラエルに抵抗できないレバノン軍に対する、レバノン人ムスリムの不満、パレスチナ難民が増加することでムスリム勢力が増大することへのレバノンのキリスト教徒の恐れ・・・何重にも絡み合った敵対の網は、以来続く数多くの戦争を引き起こした。つねに戦闘にさらされてきたキャンプには数多くの弾痕が残り、銃声の中生きてきた子供たちの多くは今、PTSDといった精神的な病気に悩まされている。

1975～ レバノンの混乱

このように絡み合った敵対の網が最も大きな形で爆発したのが1975年からのレバノン内戦だ。各派が戦闘を繰り広げる中、レジスタンスとイスラエルの戦闘は徐々に激しさを増し、1978年のイスラエルの侵攻のときには数カ月で2000名に及ぶレバノンの市民、パレスチナ人が被害者となった。

1982～ 翻弄されるレバノンのパレスチナ人

1982年、イスラエルは西ベイルートを占拠するに至り、ついにPLOはレバノンから追放された。このPLO追放の際の戦闘で、南部の難民キャンプであるラシャディエは70%が破壊され、ベイルートに近いサブラ・シャティーラでは大虐殺が行われた。イスラエルが侵略してきたのは、レジスタンスの撲滅のためだとされているが、実際は自らの土地を拡大し、より多くのパレスチナ人を撲滅するためだったのではないかと考えざるを得ない。さらに1987年、PLOのレバノンからの撤退を受けて、カイロ協定の無効化が発表される。先述のように、この協定はある程度レバノンのパレスチナ人を保護する側面があったのであり、これが無効化されることで、彼らの行動や居住の自由はさらに制限された。今では、自分の家からレバノンに出入りするときにさえレバノン軍の検問を通らねばならず、特別な permission がない限り、外国へ出ることもままならない。さらにUNRWAの活動停止と、PLOが行っていた社会的な援助の大幅な削減を受け、パレスチナ人の暮らしは非常に厳しくなっている。内戦は1990に一応の終結を見たものの、政情不安は続いており、いつまた戦争がはじまるかとびくびくしながら、レバノンのパレスチナ人たちはぎりぎりの生活を強いられているというのが現状である。

さいごに



このビデオに出演してもらった人々は
レバノンのパレスチナ難民だけ、それもおくわずかです。

パレスチナ難民は
ヨルダン、レバノン、エジプト、シリア、湾岸

そして

アメリカに至るまで

世界中に散らばって

それぞれが違う苦しみを抱えながら

日々を生き抜いています

日本ではほとんど知られていない彼らの姿を

ここで少しでも心にとどめて頂けたらと思います。

本日はご来場いただきまして、本当にありがとうございました。